

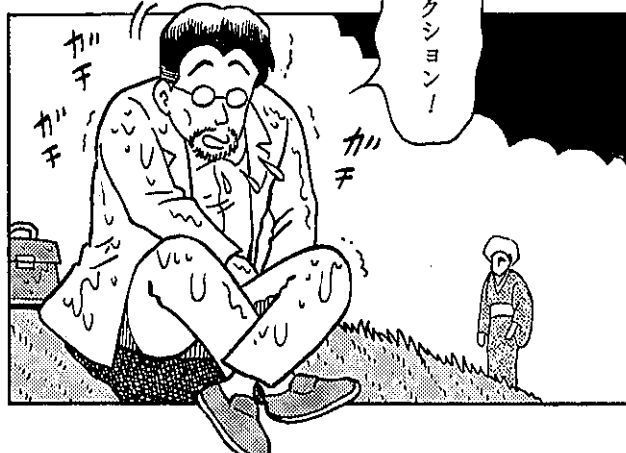
第三章 出會い——阿久比時代

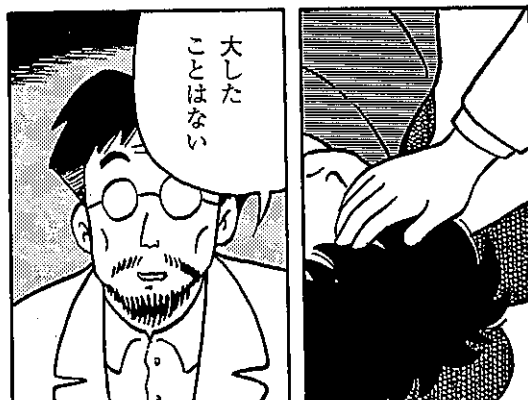


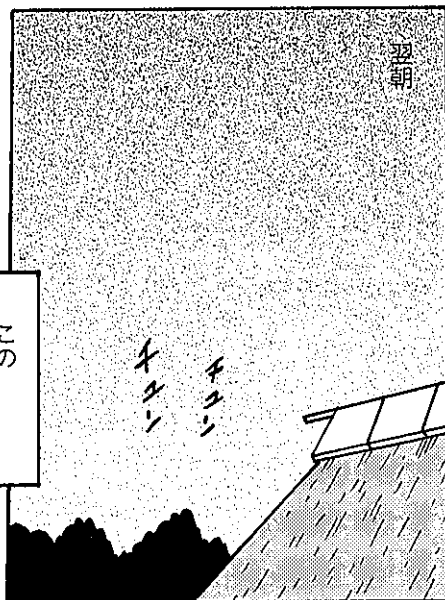
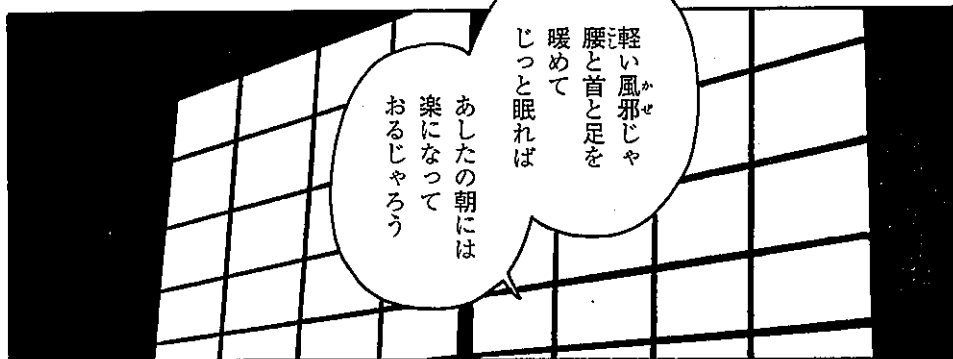
愛知県阿久比村  
(現在の阿久比町)

母その甥の七郎  
辰造らと  
阿久比へ移った  
教祖さまは  
家族とともに  
農作業に従事した

そして  
独自の修行にも  
はげんだ

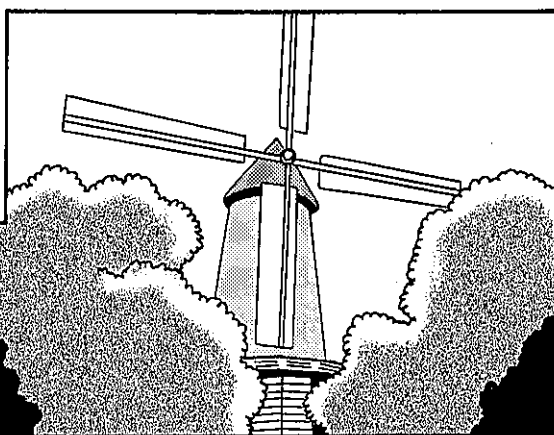


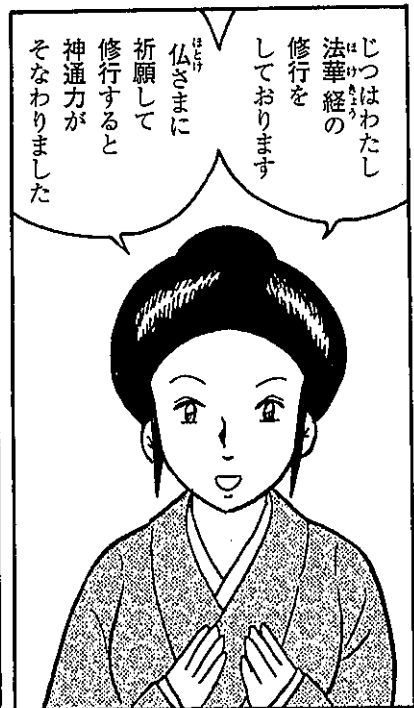
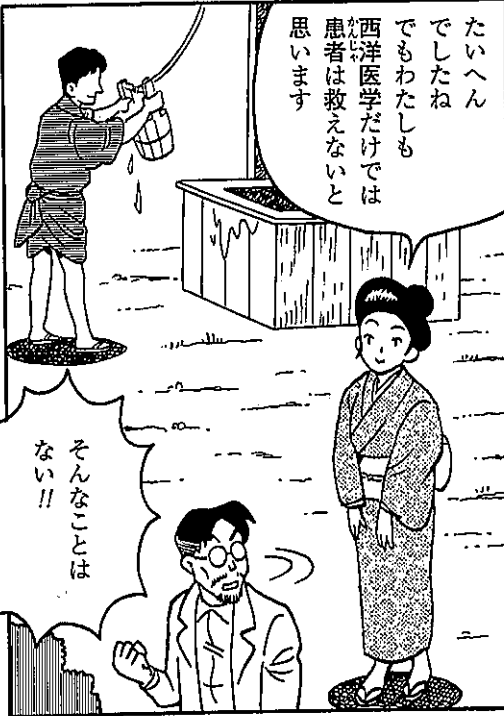




この  
老人の名は  
牧静衛

明治初期の  
日本医学界の  
改革にも  
尽力した  
人物であった





命を救う？

牧先生はわたしが  
通りかかったとき  
入水自殺をはかって  
死にきれずに  
いらしたのでは  
ありませんか？

うむ  
まあそんな  
ところじゃ

いろいろ  
不幸が重なり  
気分が滅入って  
つらくなつてな

つらい気分や  
悩む心を

救うのが  
信仰だと  
思われませんか

わたしと  
法華經の勉強を  
してみませんか？

死にたい  
気持ち  
癒されると  
思いますよ

それも  
一理ある  
じゃろ

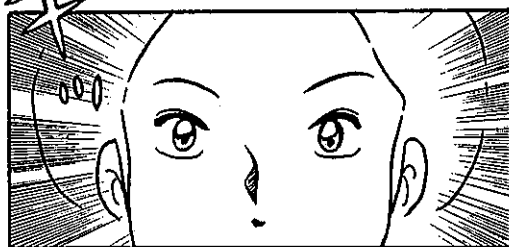
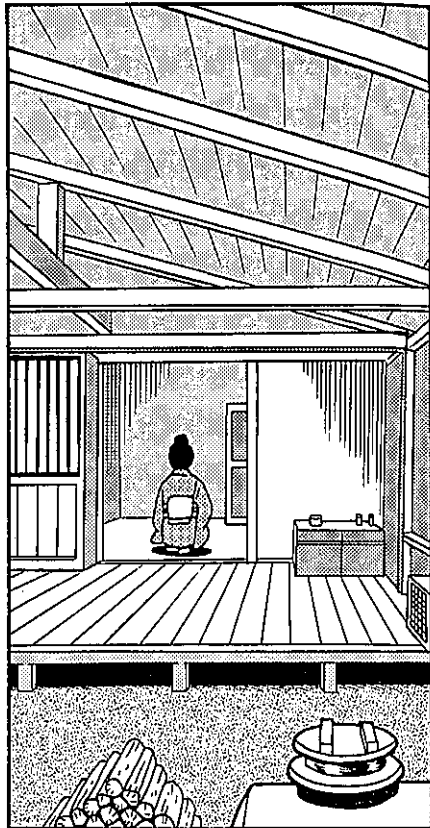
しかし  
わたしには  
ちよつとな……

ほどなく  
牧医師は  
教祖さまのもとを  
離れていった



牧先生と出会って  
医学の大切さを  
知ったような  
気がする

新しい世の中で  
悩んでいる人びとを  
救うためには  
精神修行だけでなく  
医学の知識や技術も  
必要なんだわ



将来人びとを  
広く救う組織を  
つくるならば

ぜひとも  
そういう協力が  
ほしい！

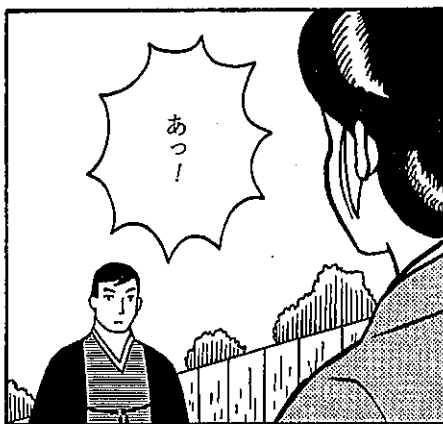
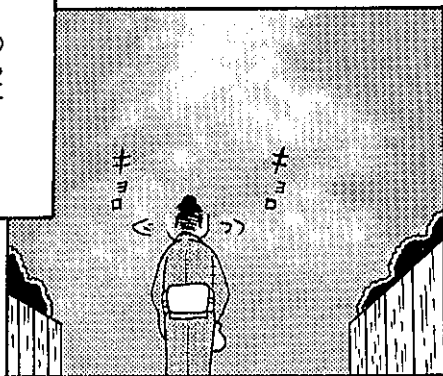
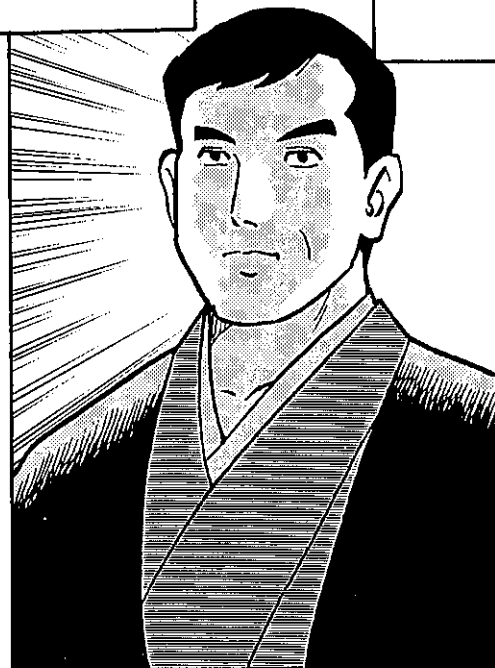
そうよ  
いまから  
さがしま  
しょう！！

各地の医師を訪ねた  
教祖さまであつたが  
なかなか思うような  
人物とは  
巡り合えなかつた



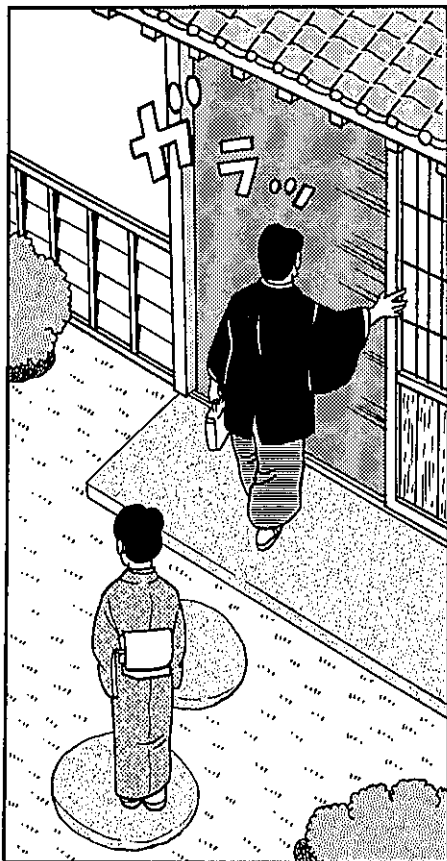
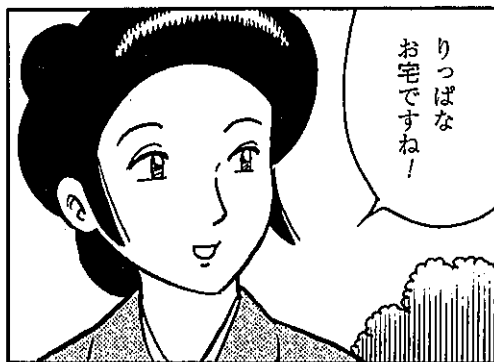
村上斎いさやとの  
運命的な  
出会いであつた

のちに  
教祖さまの  
右腕となる









教祖さまは熱心に  
宗教と医学が連係する  
組織の構想を  
語った

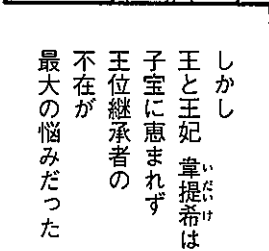
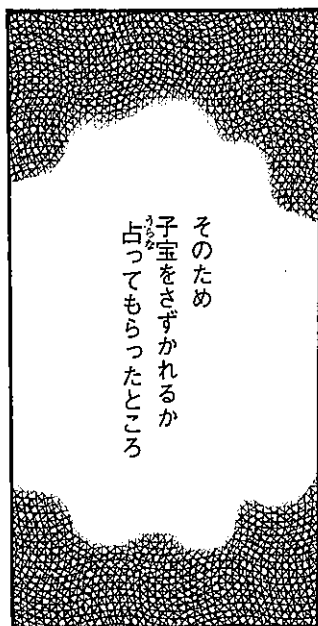
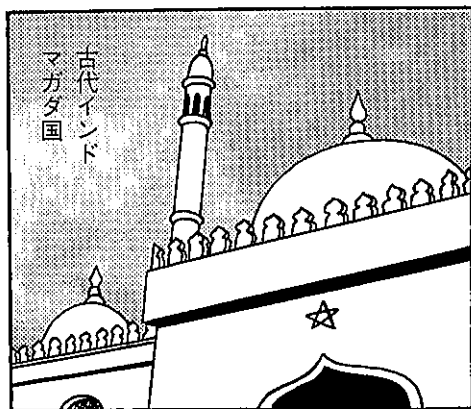
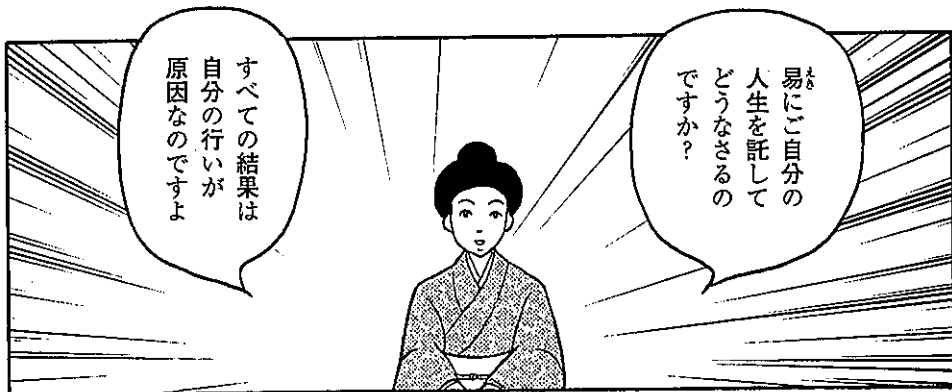
せっかくだが  
お役に  
立てそうに  
ありません

わたしはもうだめだ  
なにもする気が  
起きないのです

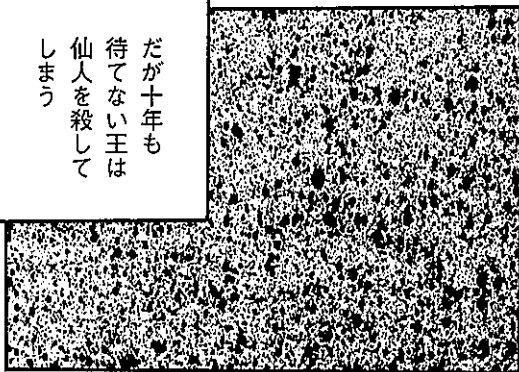
どうして  
気力が  
失せたの  
ですか？

代々受け継いできた  
財産は失うし  
妻も出て行きました  
易を立てたところ  
水山蹇の卦が  
出ていた

つまり  
八方塞がり  
なんです



だが十年も  
待てない王は  
仙人を殺して  
しまう



占い師の見立ては  
辺境に住む仙人が

十年後に寿命が尽き  
その後 王子となって  
生まれ変わるといふもの



ほどなく  
王妃は  
懐妊した



王さま  
お顔に剣難の相が  
現れております

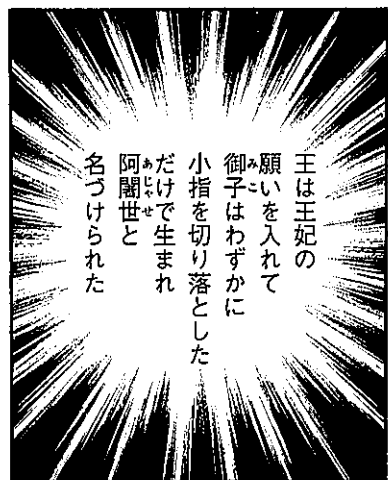
王妃が宿して  
おられる御子は  
やがて  
王を害し奉るに  
ちがいありません



わしが息子に  
殺されると……

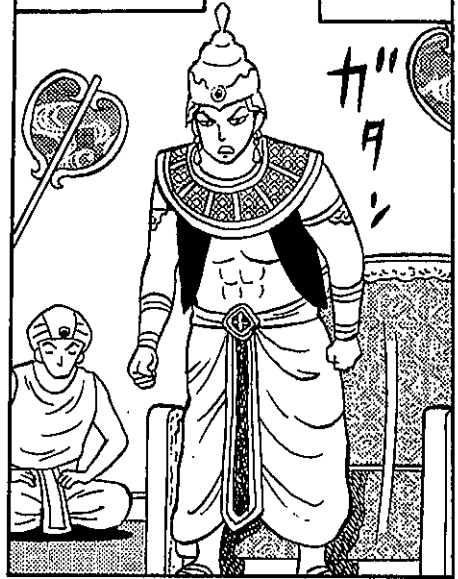
そんなことは  
絶対に  
あってはならん!





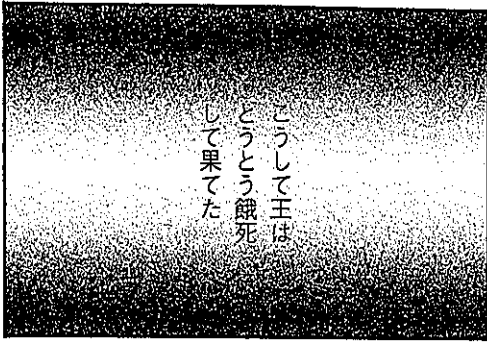
しかし悪縁は  
切れていなかった

成長した  
阿闍世太子は  
出産の事情を  
知って憤激した



おれには  
そんな過去が  
あったのか!

おのれつ  
王を嚴重に  
幽閉して  
食を与えるな

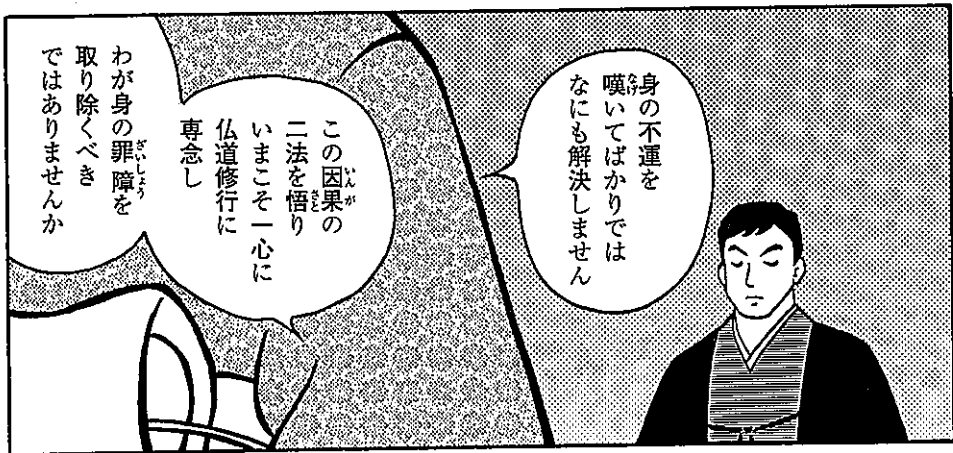


こうして王は  
とつとつ餓死  
して果てた

阿闍世太子も  
王家に生まれた以上  
過去に数々の  
善業功德を  
積まれたはずす

しかし  
悪業の因縁ゆえに  
親殺しの大罪を  
犯しました

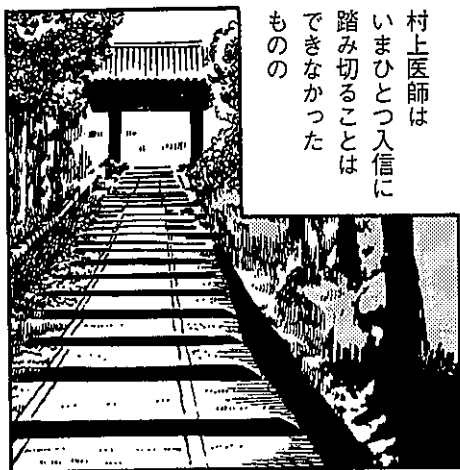




身の不運を嘆いてばかりではなにも解決しません

この因果の二法を悟りいまこそ一心に仏道修行に専念し

わが身の罪障を取り除くべきではありませんか



村上医師はいまひとつ入信に踏み切れることはできなかったもの



お話をうかがって仏さまに関心がわいてきました

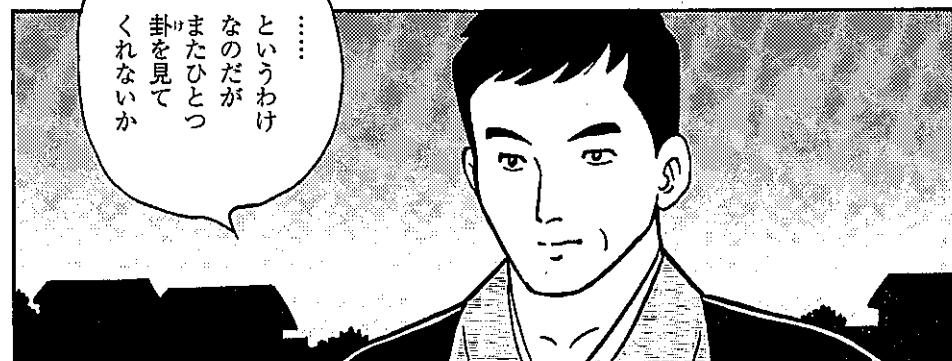
少し自分なりに勉強したいと思います

それはうれしいことですわ



家を明け渡してからは半田町の日蓮宗寺院を仮住まいに半年間集中して仏典を学んだ







なんと!



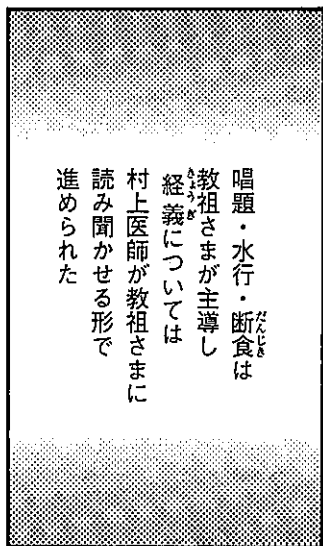
うーむ



そうか  
ありがとう  
これで決心が  
ついたよ



村上さん!  
この女性は  
すばらしい福相の  
持ち主です  
つきしたがって  
お進みなさい  
必ずよい結果が  
出ますよ



唱題・水行・断食は  
教祖さまが主導し  
経義については  
村上医師が教祖さまに  
読み聞かせる形で  
進められた



教祖さまと村上齋いづみの  
修行は九年間  
つづけられた

そんな九年目の  
ある日のこと

村上先生  
診療所を  
つくりましょう

このような  
修行生活は  
もちろん大切ですが  
これだけを  
つづけていくと  
いつか浮き世ばなれ  
してしまいます  
患者さんと接して  
教えを実践して  
いかねばなりません  
わたしたちには  
実践経験の場が必要です

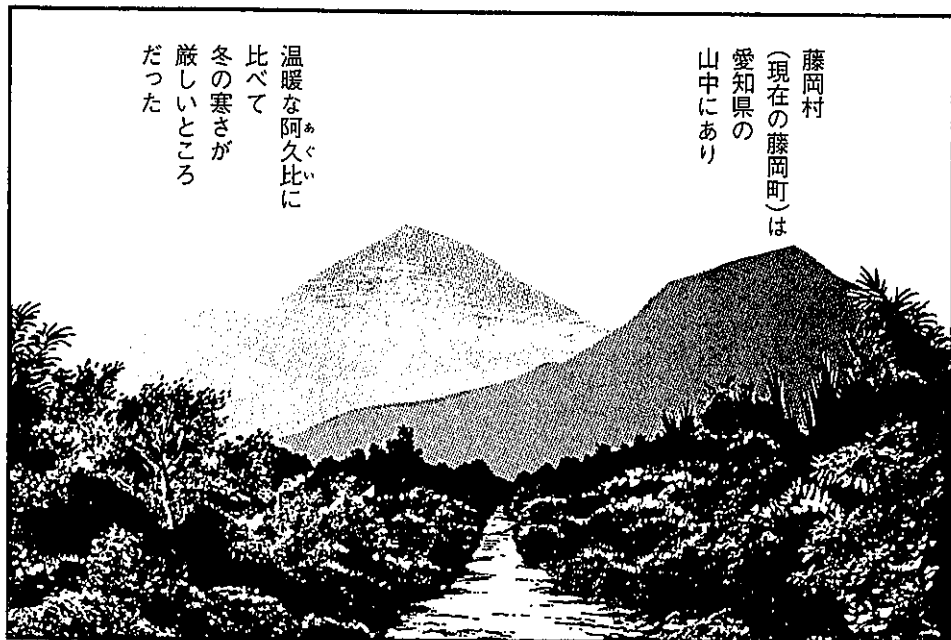
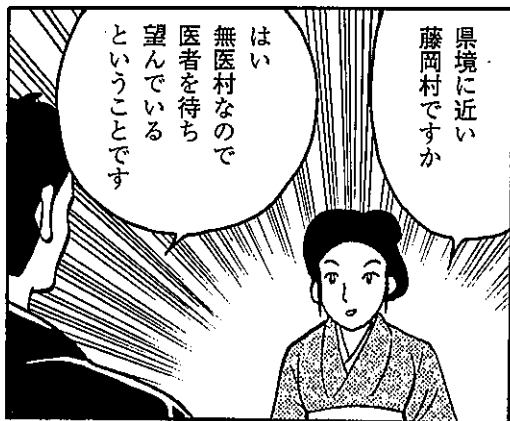
そうですね  
そろそろ  
その時機ですね

組織の設立構想は  
かなり進んでいた

実践経験の場  
としての診療所の  
条件としては  
病人の治療に  
あたると同時に

修行が  
つづけられる  
土地でなければ  
ならなかった

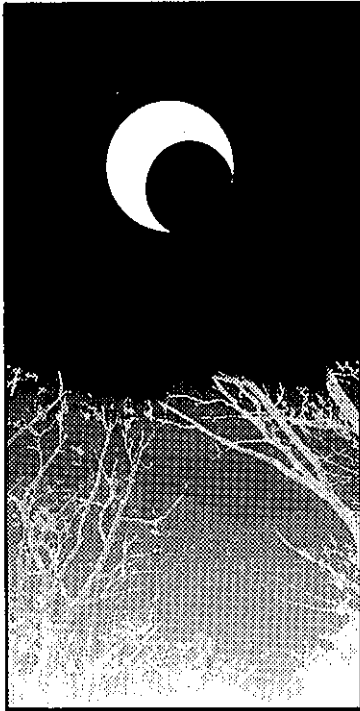




老いた母に  
同行を願うのは  
無理だわ

かといって  
母を阿久比に残して  
そこに行くのも  
不安だわ

うん  
ここは考え  
どころですね

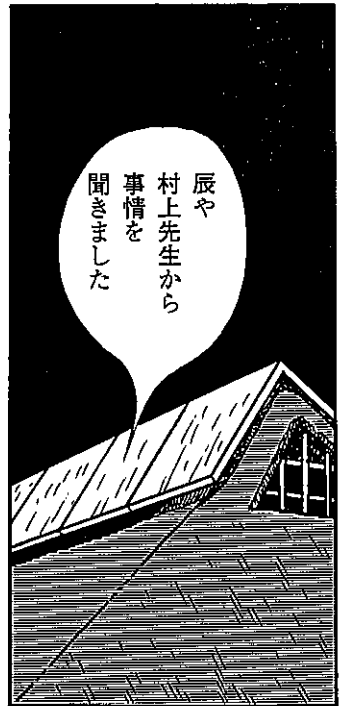


辰や  
村上先生から  
事情を  
聞きました

おまえが  
おなかのなかに  
宿った頃

わたしは  
毎日毎日  
八幡神社に  
お参りして  
一生懸命 拝んで  
いたものです

よい子がほしい  
すばらしい子を  
さずかりたいと  
一心に拝みました





はい



わたしだけが  
そうしている  
ものと  
思っていたら

いつだったか  
お父さんが  
仏壇に手を  
合わせているの  
を見つけました



どうか  
生まれて  
くる子が  
丈夫で  
ありますように

南無妙法蓮華經  
南無妙法蓮華經



「よい種を蒔けば  
よい収穫が得られる」  
って……

ええ  
おまえは  
いつも言ってる  
じゃない



なんども  
そうつぶやいて  
いたのです

あの  
厳格な  
お父さまが！



わたしたち夫婦が  
神仏に祈ったから  
おまえは人さまに  
つくそうという

こない子に  
育ったんじゃないかと  
わたしは思います

お父さまも  
ここにいらしたら  
きっと同じことを  
おっしゃるでしょう

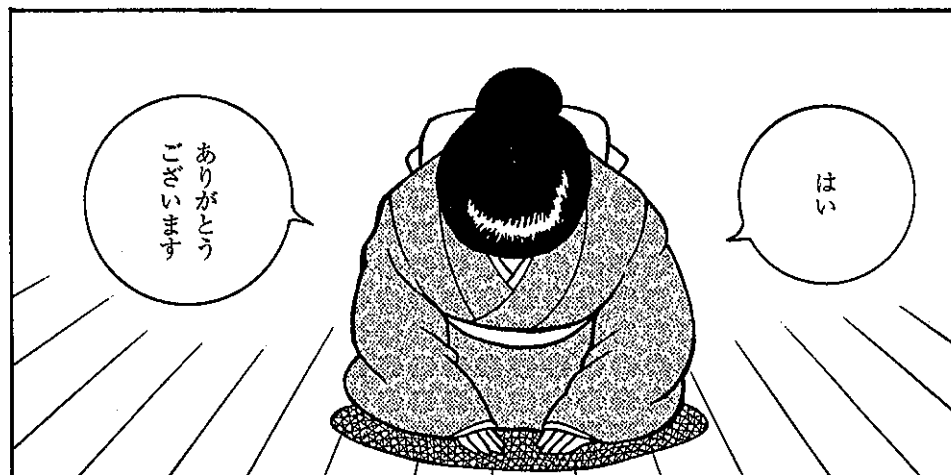


わたしのことは  
気にしなくても  
七郎や辰造が  
います

おまえは  
おまえの道を  
進みなさい



お母さま……



ありがとう  
ございます

はい

母から  
激励を受けました



よかったですね  
精進  
しましょう



明治四十三年  
(一九一〇)  
一月七日  
教祖さまと村上齋は  
阿久比村を出て  
藤岡村に向かった

